

第4分科会

大学教育と学生生活における SNS (social networking service) の光と影

報告者

村上 正行 (京都外国語大学 マルチメディア教育研究センター 准教授)

大塚 成男 (千葉大学大学院 人文社会科学研究科 教授)

日下 修一 (獨協医科大学大学院 看護学研究科 准教授)

吉田 諒介 (京都橘大学 看護学部 1 回生)

コーディネーター

河原 宣子 (京都橘大学 看護学部 教授)

現在、SNS (social networking service) による情報伝達技術が急速に発達し、人々のコミュニケーション方法やライフスタイルに大きな変化を与えています。大学教育あるいは学生生活においても、SNS は災害時の安否確認や学習コミュニティでの活用など有効活用されていますが、個人情報漏洩や他者への誹謗中傷、ネット依存などの社会問題も抱えています。この分科会では、ソーシャルメディアを活用した教育、卒業生に軸足を置いた SNS の活用、ネット依存への対応などさまざまな報告をいただき、学生間の情報伝達手段が劇的に変化する中、私たち教職員はどのように関わっていけばよいかを参加者の皆さまと考えたいと思います。

＜第4分科会＞

大学教育と学生生活における SNS (social networking service) の光と影

参加人数	31名
報告者	
第1報告者	村上 正行 (京都外国語大学 マルチメディア教育研究センター 准教授)
第2報告者	大塚 成男 (千葉大学大学院 人文社会科学部 教授)
第3報告者	日下 修一 (獨協医科大学大学院 看護学研究科 准教授)
第4報告者	吉田 諒介 (京都橘大学 看護学部 1回生)
コーディネーター	河原 宣子 (京都橘大学 看護学部 教授)

分科会のねらい

本分科会では、現在、急速に発達し、人々のライフスタイルやコミュニケーション手段に大きな変化を与えている SNS (social networking service) に注目した。SNS のような情報伝達技術の進歩は、大学教育あるいは学生生活においても大きな影響力をもつ。例えば、災害時の安否確認や学習コミュニティでの活用など、有効な面も多いが、個人情報の漏洩や他者への誹謗中傷、ネット依存など社会問題も抱えている。学生間の情報伝達手段が劇的に変化する中、私たち教職員はどのように関わっていけばよいかを考えたい。

分科会の概要と全体討議

第1報告者の村上正行氏からは、「ソーシャルメディアの現状」というテーマで、現在、学生が利用している SNS などのソーシャルメディアについて報告があった。

わが国においても右肩上がりにソーシャルメディアの利用者数が増加している。生まれた時からインターネットやパソコンのある生活環境の中で育ってきた世代を「デジタルネイティブ」、インターネットやパソコンが普及する以前に生まれ、それらの技術を身につけようとしている世代を「デジタルイミгранト」という言葉で表現されているなど、人びとの生活にソーシャルメディアが広く深く浸透している現状が述べられた。さらに、Facebook, Twitter, LINE 等について、実際の画像と共にわかりやすく紹介された。また、「炎

上」の定義や分類、なぜ炎上するのかという問題や、ソーシャルメディアの取り扱いに関するガイドラインについても報告があった。

第2報告者の大塚成男氏からは、「卒業生を主たる対象とした大学独自の SNS の構築と運用」というテーマで、千葉大学校友会が取り組んでいる「Curio」と呼ばれる SNS についての報告があった。

個人情報保護法の制定により、同窓会名簿の作成と配布が困難となった背景から、同窓会名簿の機能と人的ネットワーク構築という目的を兼ね備えた SNS に着目し、既存の学部を超えた人的交流と大学への帰属意識を高める効果をねらったのだと述べられた。「Curio」は、千葉大学に籍を置いたことのある者が正会員として登録でき、学生は準会員である。現在、当初のねらい通りの成果はあるものの、入会登録方法や前述の「デジタルイミгранト」がもつインターネットスキルの問題等から登録者数が伸びないといった課題もあるのだという。しかし、「Curio」は商業ベースのソーシャルメディアではないことを強調された。あくまでも「実社会での人的交流の延長線」という目的から、今後は各学部の活動と連携をとりながら、ゆったりとした時間の中で、人的交流を図れるという強みを生かしていきたいと、まとめられた。

第3報告者の日下修一氏からは、「大学生の SNS・ネット依存と対処について」というテーマで、主として「依存」に関する報告があった。

ネット依存に関しては、USA や韓国などで定義されているが、日本ではまだ明確な定義は示され

ておらず、今後、DSM-Vにその診断名が明記され、わが国においても使われることになるであろうと述べられた。その際に、注意しなければならないのは、ネット依存を診断することではなく、ネット依存を予防していくことであると述べられた。依存には特に家族機能が大きく影響すること、自分自身の強さや弱さを理解して認めること、責任逃れをしないこと、子どもの頃にほしかった親の愛情はもう得られないと理解することなど、日常的に大学生に関わる中で有用な詳細な対処方法について報告があった。

第4報告者の吉田諒介氏からは、「キャンパスライフとSNS」というテーマで、デジタルネイティブである学生の視点から、報告があった。

自身が使っているFacebook、LINE、Instagramの使用方法を述べ、しばらく連絡が取れていない友人の現状を知ることができたり、自身の悩みをつぶやいたり、人とのつながりが絶えにくいという感想と、サークルイベントの出欠や運営管理などに使用していると紹介があった。また、学生に浸透しているSNSには、Facebook、Twitter、Mixi、Skype、DECOLOG、LINEなどがあると述べ、何気ないつぶやき、サークルのイベントの集客と報告としてのつぶやき、写真の共有、暇つぶし、行方不明の物・人についての情報共有、他大学の学生との交流、志望している企業の情報収集等に使用していると報告があった。SNSの利点については、いつでも・だれとでもつながりが持てること、リアルタイムで情報を得られることなどがあげられ、欠点としては、個人情報流失しやすい、失言・リークなどの問題が生じやすい、コミュニティに加わり損ねた人間が孤立するといった内容があった。利点にも欠点にもなることとして、情報がすぐに拡散するという特徴も述べられた。

質疑応答・意見交換においては、「コミュニケーションのあり方」と「ガイドラインの有効性」について様々な質問と意見が出され、活発な議論がなされた。果たして、SNSは一方向のコミュニケーションなのか、それとも双方向のコミュニケーションなのか、ノンバーバル性は含まれないのか等々、多

くの事例も紹介されながら、参加者と報告者間で意見交換がなされた。大学教育において、学生が効果的にコミュニケーションスキルを学習するにはどうすればよいかの議論もあった。ガイドラインについては、学生だけに限らず、教職員においても「常に他者に見られているのだという意識」を醸成すること、大学の責任の範囲を明確にしておくこと、ネットリテラシー教育の充実の必要性等が議論された。

分科会を終えて

今回は、FDフォーラム分科会において初の試みであるSNSやソーシャルメディアに関するテーマであった。分科会全体を通して、大学の教職員に高い関心があることが伺えた。また、今回の学生の報告から、おそらくほとんどの学生がSNSというツールを自身の日常生活にうまく取り込み、活用しているであろうという印象を受けた。人的ネットワークの構築にインターネットなどのソーシャルメディアを利用することは、多くの可能性と発展性を持っている。その一方で、ネット依存やコミュニケーションの困難さなどの問題も孕んでいる。大学教育においては、学生に、自分自身と、そして他者と正面から向き合える姿勢を育んでもらうことも重要であると再認識できた。どのような事象にも、光と影は存在する。その両方を理解しながら、私たちは日々の大学運営や教育活動に取り組んでいかなければならないと考える。

報告者の皆さまの貴重なご講演、そして、参加者の皆さまとの有意義な意見交換を通して、多くの学びを得ました。心よりお礼申し上げます。

ソーシャルメディアの現状

京都外国語大学 マルチメディア教育研究センター 准教授

村上 正行

ソーシャルメディアの現状

京都外国語大学
マルチメディア教育研究センター 准教授
村上正行
masayuki@murakami-lab.org
Twitter ID: @munyon74
ハッシュタグ: #fdf18

SNSとは？

- Social Networking Serviceの略
- 人と人とのコミュニケーションを支援するコミュニティサイト
- 知り合いの紹介によるメンバーによって構成されるので、安心感がある
- 「友人の友人」や、同じ趣味、出身校の人と知り合うことができる

ソーシャルメディアとは？

- オンライン上でユーザーどうしを情報を交換することによって成り立っているメディア
 - mixi、GREE、モバゲー
 - YouTube、ニコニコ動画、Ustream
 - twitter、LINE

大学生の気質の変化

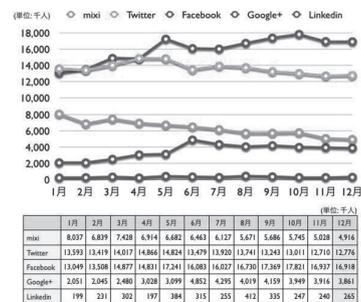
- デジタルネイティブ : 生まれながらにICTに親しんでいる世代(1990年代以降生まれ)
- デジタルイミグレート: IT普及以前に生まれて、ICTを身につけようとしている世代
- 「テクノロジーは発明される前に生まれた人にとってのみテクノロジーとして意識される」(アラン・ケイ)

デジタルネイティブの8つの特徴

- 1) 何をする場合でも自由を好む。選択の自由や表現の自由だ
 - 2) カスタマイズ、パーソナライズを好む
 - 3) 情報の操作に長けている
 - 4) 商品を購入したり、就職先を決めたりする際に、企業の誠実性とオープン性を求める
 - 5) 職場、学校、そして、社会生活において、娯楽を求める
 - 6) コラボレーションとリレーションの世代である
 - 7) スピードを求めている
 - 8) イノベーターである
- ドン・タプスコット(2009)「デジタルネイティブが世界を変える」

日本のソーシャルメディアユーザー数

■ PC訪問者数推移



<http://media.loops.net/sekine/2013/01/29/neilsen-netview-201212/>

Facebook

- <http://ja-jp.facebook.com/>
- 2004年にハーバード大学の学生だったマーク・ザッカーバーグが創業
 - ハーバード大学の学生が交流を図ることが目的
 - 数日後、Ivy Leagueの学生にも開放
 - その後、徐々に全米の学生(.eduドメインのメールアドレスを持つ学生)に開放
 - 2006年9月にすべてに開放
- Microsoftと広告に関する独占契約を結ぶ

世界最大のSNSが日本へ

- ユーザー数はMySpaceを抜いて世界1位に（現在10億人以上）
- 日本にも市場を求めろ
 - <http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0911/11/news091.html>
 - <http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/column/20110511/1035590/>
 - 日本のユーザー数は1000万人を超える
<http://jp.techcrunch.com/archives/jp20120316facebook-10million-login-users-in-japan/>

Facebookの特徴

- 完全実名制
- 「いいね」ボタンの気軽さ
- Webとの連動
- 情報の公開範囲を細かく設定可能
 - ただ、デフォルト(初期設定)がオープンという問題
- レコメンデーション(推薦)機能が強力

グループ

- ユーザーを限定して、連絡、情報共有などを行うことが可能
- さまざまな設定ができる
 - 公開、非公開
 - 招待

Facebookページ

- 企業、個人、同好会などが、ユーザーとの交流のために作成・公開したページ
- Facebookページの「いいね！」を押してファンになると、そのFacebookページに関する情報をホーム画面で読むことが可能

Facebookの問題

- 写真の公開などが問題に
 - 「友人・知人による勝手な情報公開に9割以上が不快」
<http://jp.trendmicro.com/jp/about/news/pr/article/20120410035738.html>
- Facebook疲れ？
 - <http://news.goo.ne.jp/article/r25/life/r25-20120410-00023397.html>
 - <http://nikkan-spa.jp/199461>

twitter

- <http://twitter.com/>
- 2006年7月スタート
- “What are you doing?”の質問に対して140文字以内でつぶやきを投稿
- つぶやきをただ書いただけ、というシンプルさが流行の秘訣？
- 画面には自分の投稿以外に、あらかじめ登録した知人など他者の投稿もほぼリアルタイムに表示される

利用方法

- つぶやきを見たい人をフォローする
- そうするとタイムライン(TL)にフォローしているすべての人のつぶやきが見れる
- 返信も可能(ただ、他の人にも見られる)
- RT(ReTweet)することで、他人のつぶやきを転送することができる
 - MT(Modified Tweet)、QT(Quote Tweet)

Twitterの特徴

- ジャーナリストの津田大介氏は「Twitter社会論」で特徴を6つ上げている
 - リアルタイム性
 - 強力な伝播力
 - オープン性
 - ゆるい空気感
 - 属人性が強い
 - 自由度が高い

リアルタイム性

- 実際世界の実時間での同期性がある
- 今起こったことを知ることができる
 - 地震情報
 - 電車の遅れ
 - 友達や有名人の何気ない行動
- 東日本大震災の際には、安否確認などにも利用

Tsudar

- 津田大介氏が始めたと言われる、twitterを使っての実況中継のこと
- 「社会問題上重要度の高いカンファレンスにオンライン状態で出席し、現場で発表された発言の140字要約postをTwitterのTimeline上に送り続ける行為」
- 2007年5月の文化審議会私的録音録画小委員会を中継したのが発端
- 様々なイベントをはじめ、国会などもtsudarの対象となっている

強力な伝播力

- RTがつながることによって、どんどん発言が電波していく
 - フォローされている人が多ければ、伝播力も強まる
- ↑↓
- 有名人、著名人などにRTされれば強力

バイラルマーケティングが可能

オープン性

- API(Application Programming Interface)を公開
- だれでもtwitterを活用したハードウェアやソフトウェアを開発することができる
- これによって、多くのクライアントやサービスが提供される

ゆるい空気感

- mixiなどと違って、相互承認は必要がない
- 「つぶやき」がベースなので、返信が必要というわけではない

属人性が強い

- タイムラインは人によって異なるので、個人の特性はかなり大きく出る
- ユーザーの利用目的によって、使い方の自由度が高い

そもそも「140文字以内でつぶやく」というだけのシンプルなサービスだから、とも言える

LINE

- <http://line.naver.jp/ja/>
- 通信キャリアの垣根を越えて利用できるグループコミュニケーションアプリ
- 違うキャリア同士でも、無料で音声通話やメッセージのやりとりができる
- 2012年7月現在
登録ユーザー数5000万
国内ユーザー数2000万



LINEはケータイメールの代替？

- スマホ持ち女子高生の7割が利用
- ケータイメールの代わりとして利用される
 - トップ画面からすぐ利用可能がポイント
 - メールを送る頻度が減った 37.6%
 - 吹き出し形式で一覧できる
- グループなどでの利用も有用
 - 友人グループやグループ学習など



LINE

- スタンプが特徴
- 気楽な感じで使うことが可能
- 基本無料だが、有料のものもある



© NHN Japan Corp. All rights reserved.

炎上とは

- サイト管理者の想定を大幅に超え、非難・批判・誹謗・中傷などのコメントやトラックバックが殺到することである(サイト管理者や利用者が企図したものは「釣り」と呼ばれる)
田代光輝『学びとコンピュータハンドブック』

お笑い芸人の被害

- 人気番組『逃走中』でドラクドラゴンの鈴木拓が自首して130万円ゲットするもTwitter上で叩かれる「ルールなのになんで？」
– http://news.biglobe.ne.jp/trend/1009/gad_121009_9762102847.html
– <http://togetter.com/li/388020>
- トータルテンボス藤田「お笑い評論家気取りが多すぎる。ツイッターやめる」
– <http://rocketnews24.com/2012/10/15/257277/>

大学生の炎上事件

- 「早慶大学生」ら次々ネットで炎上 車内で無断撮影、ツイッターで中傷
– <http://www.j-cast.com/2011/11/151113101.html?p=all>
- “共有”か“盗撮”か 他人を無断撮影して投稿、炎上する学生相次ぐ
– <http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1111/12/news020.html>

炎上は昔から

- ブログが普及した頃、「ブログ炎上」が問題に
– <http://matome.naver.jp/odai/2129230635302579601>
– <http://matome.naver.jp/odai/2132626191331527901>

炎上の分類

- 田代光輝による分類
(『学びとコンピュータハンドブック』より)
 - 反社会的な行為の告白
 - 知ったかぶり
 - 特定ターゲットへの悪口・軽蔑
 - 提灯記事
 - 利益誘導

なぜ炎上するのか？

- インターネット(特に、2ちゃんねる、Twitterなどの匿名的なメディア)の普及により、一般人と著名人の垣根がなくなってしまう
- 「仮想的有能感」(他者軽視)をもつ人が増加
- 相手を批判することで、自分が正しいと感情をもつ

なぜ炎上するのか？

- 槇田雄司氏(マキタスポーツ)は
 - 自分ではなにもしないのに他人がすることについて批評、時に批判する」ことをツッコミ志向
 - ツッコミ志向=他罰的
 - 世の中がツッコミ志向に偏りがち

炎上から身を守るために

- 聖心女子大学におけるソーシャルメディア扱いのガイドライン
 - <http://www.u-sacred-heart.ac.jp/life/files/socialmedia.pdf>
 - <http://bizmakoto.jp/bizid/articles/1209/28/news081.html>

午後のディスカッションに向けて

- 大学教職員として、どのように関わっていけばいいのか？
 - ソーシャルメディアと
 - ネットを活用している学生たちと
 - ネットが普及してきた社会と

卒業生を主たる対象とした大学独自の SNS の構築と運用

千葉大学大学院 人文社会科学研究所 教授

大塚 成男

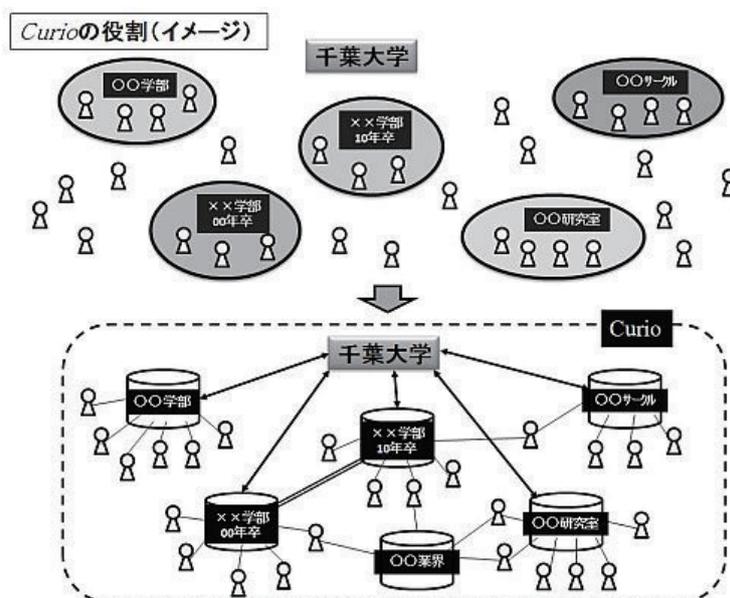
1. SNS 構築の経緯

本報告で取り上げる千葉大学独自の SNS 「Curio (キュリオ)」は、千葉大学の学部毎に設立されてきた同窓会組織の連合体である千葉大学校友会によって構築・運用されている。したがって建前上は、「Curio」の運用資金や運用組織は国立大学法人千葉大学とは切り離されている。しかしながら、現実としては、千葉大学の教員・職員が事務局を務めており、教員を中心とするワーキング・グループが月 1 回の定例会議を開いて運営方針やカスタマイズの内容を決定している。

千葉大学校友会が独自の SNS の構築に乗り出した契機は、2005 年における「個人情報の保護に関する法律（個人情報保護法）」の施行であった。それまで各同窓会が事業として実施してきた活動の中心は同窓会名簿の作成と配布であったが、個人情報保護法の施行によって、個人情報のまとまりである同窓会名簿を印刷物として従来通りに作成・配布することは困難になると考えられた。その一方で、同窓会は卒業生間の連絡手段を確保することを大きな任務としており、同窓会名簿の作成・配布をやめてしまえば、同窓会そのものの存在意義にも疑問符が付きかねない。そこで、従来からの印刷物としての同窓会名簿に代替する手段として、個人情報を保護しつつ会員間の連絡や交流を促進することができる仕組みとしての SNS を構築することが目論まれた。

したがって、「Curio」は情報発信と相互交流の機能を有するインターネット版の同窓会名簿であると位置づけられている。そして「Curio」を運用することで、インターネットには地理的な制約がないことを活用して、千葉大学関係者の人的ネットワークを維持・拡大することを目指している（図 1）。

図 1 「Curio」の役割に関するイメージ図



「Curio」に期待されたのはまず、学部卒業や大学院修了後も在学中に培った人的ネットワークを維持するうえでの連絡手段の確保であった。これまでも卒業生による出身学部、研究室、あるいはサークル単位でのコミュニティは形成されていたが、その維持は個々のコミュニティのメンバーの労力に依存しており、多くのコミュニティが時間の経過とともに連絡手段を失っていくことで消滅してしまうのが実情であった。それに対して、「Curio」

を通じてメンバーに負担をかけない形で安定した連絡手段を確保することができるのであれば、人的ネットワークも安定して維持されていくと考えられた。また、これまでの卒業後のコミュニティはそれぞれが孤立して存在しており、いずれのコミュニティにも加わっていない卒業生も多かった。「Curio」を通じてどのようなコミュニティが存在するについての可視性が高まれば、新たにコミュニティに加わる卒業生も増え、コミュニティ間の連携も高まることで、既存の枠組みを超えた人的交流の場を提供することが可能となる。さらにそのような場を提供しているのが、千葉大学によって構築・運営されている SNS であることにも意味がある。単にインターネット上でコミュニティを形成し、連絡を取り合うだけであれば、既存の SNS でもできる。あえて千葉大学が千葉大学の卒業生に対してコミュニケーションの場を提供することで、卒業生の中に千葉大学に対する帰属意識を醸成することも重視された。また、千葉大学の卒業生による人的ネットワークの活動が千葉大学により運営されている SNS の中で行われるのであれば、千葉大学としてもどのような活動が行われているのかを把握することができる。それゆえ「Curio」は、千葉大学と卒業生との結びつきを強化・維持するうえで、大きな役割を果たし得ると考えられ、千葉大学校友会の主要な事業として構築・運営が進められることになった。

「Curio」のシステムは Open PNE をベースとしているが、大学同窓会による Web 版同窓会名簿であり、大学同窓会の活動に関する情報を卒業生に伝達することが重要な機能であるため、大きなシステム改変が必要であった。そこで 2007 年 1 月に有志の在校生や卒業生による試験的なシステムの運用を開始し、最終的なカスタマイズを行ったうえで、2007 年 10 月に正式な運用を開始した。その後も、「Curio」の会員となった卒業生による利用状況をモニターしながらシステムのカスタマイズを繰り返している。2012 年 12 月 31 日現在の会員数は 3,469 名であり、ページビュー数は月あたり約 5,000 件である。

2. 「Curio」の特徴

「Curio」は千葉大学校友会が運用する千葉大学関係者のための SNS である。それゆえ、「Curio」に会員となることができるのは、千葉大学に学生、教員、および職員としての籍を置いたことがある者と、現時点で籍を置いている者に限定している。そのため、会員登録にあたっては、事務局が入会申込みを受け付けた後に、学部同窓会等を通じて有資格者であることを確認したうえで、システムへの登録を行う。入会希望者がインターネットを通じて自ら入会登録をすることはできない。

また、「Curio」のシステムは Open PNE をベースとして構築したが、正式運用にあたって特に以下の 2 つのカスタマイズを行った。

1 つは「Curio」内での匿名による活動を不可能にするためのカスタマイズである。具体的には、プロフィールにおける氏名を事務局のみが登録できる仕様とし、会員自身であっても氏名の変更や削除はできないようにした。ニックネームの使用は認めているものの、他者に対して実名を秘匿することはできない仕組みになっている。「Curio」が同窓会名簿の代替物と位置付けられている以上、「Curio」内での活動にあたって実名の表示を求めることは当初からの方針であった。ただし、同窓会名簿という性格から、登録される実名は会員が千葉大学に在籍していた時点での氏名とし、結婚等で改姓した場合には、ニックネーム等で対応することになる。

もう1つの点としては、プロフィールに出身学部を指定するメニューを追加し、会員が自らの出身学部を指定すれば、自動的に同窓会別の連絡用掲示板のメンバーとして登録される仕組みを設けた。プロフィールでの指定を行えば、それだけで会員の個人ページに同窓会別の連絡事項のリストが表示されることになる。事務局における会員の管理も、基本的には所属同窓会別に行っている。

以上のような初期のカスタマイズに加えて、実際の運用を行う中で明らかになった会員のニーズに応えるためのカスタマイズも行ってきた。

まず、添付ファイルの制限を緩和し、PDFファイルのアップロードもできる仕様とした。これは、同窓会毎に作成されている発行物（同窓会報等）をPDFファイルで配布することを想定したカスタマイズである。さらに、毎年 of 出版物のアップロードが行われることで、「Curio」が同窓会報のアーカイブとして機能することも期待している。

また、昨年5月には、「Curio」とfacebookとの連携も図った。現在は、会員が自らのプロフィールで設定を行えば、「Curio」の会員個人ページにfacebookのタイムラインが表示されるようになってきている。実際には複数のSNSを利用している会員も多いため、それぞれのSNSに別個に記事を書き入れることの負担を軽減するために行った措置である。あわせてfacebookに「Curio」のページも設け、「Curio」の存在に対する認知度を高めるための活動も行っている。

商用の大規模なSNSには比ぶべくもないが、5年間の正式運用を通じて「Curio」の会員数は3,000名を超え、卒業生を中心とする千葉大学関係者の交流を促進するうえで一定の役割を果たしつつある。たとえば、「Curio」の掲示板を通じて学生時代に指導を受けていた教員の消息に関する問い合わせと情報の提供が行われ、直接には面識がなかった卒業生同士の交流が行われたケースがある。また、事務局を中心として「Curio」の中に過去の千葉大学の写真のライブラリを整備・拡充する活動を続けており、毎月相当数のページビューを確保することができていることから、卒業生の千葉大学に対する関心を維持する役割を果たすことができていると考えている。しかしながら、全体からみれば「Curio」がカバーしている千葉大学関係者の割合はまだ少なく、当初からの同窓会名簿に代わるものとしての役割を十分に果たすことができているとは言えないことも事実である。

3. 「Curio」における課題

実際に「Curio」の運営を行う中では、以下の3つの点が大きな課題となっている。

① 会員間のインターネットに関する習熟度や考え方の違いへの対応

「Curio」が主たるターゲットとして取り込もうとする卒業生の多くは、比較的年齢層が高く、インターネットの利用に習熟しているとは言い難い。そのため「Curio」の運営にあたっては、インターネットに関するスキルが十分ではなく、アクセスする頻度が低い会員も、コンスタントに「Curio」にログインし、掲載された情報を閲覧してもらえる環境を整える必要がある。

一方、現時点で大学に在籍している学生のインターネットに対する習熟度は高い。「Curio」の目的が千葉大学関係者の人的交流を広げることである以上、現役学生と卒業生との交流を促すことも重要である。しかし、現役学生と卒業生との間のインターネットに関するス

キルや認識の相違が「Curio」の運営に支障を生じさせることも危惧された。

そのような危惧が抱かれることとなった一因に、「Curio」の試験システム運用時に展開された匿名性に関する論争がある。当時、「Curio」をアクティブに利用していた現役学生から、実名表示を義務付けるという「Curio」の運営方針に対して強い反対意見が表明された。その理由としてまず挙げられていたのは、実名を表示しても「荒らし」の防止にはならないという点や、「Curio」に登録された実名が何らかの形で悪用されることに対する忌避感であった。しかしながら、「Curio」で実名表示を求めるのは「Curio」のそもそもの目的が同窓会名簿の代替となることであるためであり、それらの反対理由は的が外れている。ただし、その議論の中で、日常生活の中で直接に顔を合わせる機会が多い現役学生は、日常とは異なる（あるいは日常ではできない）活動を「Curio」の中で行おうとしていることがそれらの反対意見の背景にあることが明らかになり、その点が問題視された。

「Curio」の中で展開されるべき人的交流は、千葉大学の卒業生同士の交流であり、あくまでも実社会における人的交流の延長線上にあるものである。必ずしも「見知らぬ人」との交流や現実社会とは異なるスタンスでの交流を図ることが目的とされているわけではない。また、会員数やアクセス数を増加させなければ存続し得ない商用 SNS と異なり、千葉大学関係者への連絡版である「Curio」では会員に毎日のようにログインすることを求める必要はない。その点で、「Curio」において「遊び」という要素を重視する必要もない。それに対して、実名表示に反対する現役学生の多くは、「Curio」を既存の商用 SNS と同種の物として捉えていた。そして、現役学生は「Curio」の中でもバーチャルな人間関係を形成しようとする傾向が強く、その傾向は社会的経験が乏しい現役学生においては一般的なものであると推測された。

インターネットにおいて匿名性が悪用されて様々な問題が起きている状況を考えれば、インターネットを基本的にバーチャルなものとして考えている現役学生が「Curio」の中の活動の中心となった場合、「Curio」においても様々な問題が生じることが危惧された。その一方で、継続的に入会してくる現役学生にいちいち「Curio」と商用 SNS との相違を説明し、「インターネットでは匿名が当然」「インターネットはバーチャルなもの」という認識を払拭することも困難であると考えられた。そこで、「Curio」では現役学生を準会員として区分し、あくまでも正会員による活動に準会員（現役学生）が参加するという方式を採用することになった。準会員の権限に対する制限は次第に緩和してきているが、必ずしもインターネットに習熟していない世代の会員を「Curio」の中の活動における主役として位置づけるうえで、正会員と準会員の区別は今後も維持していく方針である。

②コミュニケーション・ツールが多様化していることへの対応

現時点において、インターネット上で利用し得るコミュニケーション・ツールは多岐にわたる。facebook や twitter といった波及力の大きなツールが普及している状況下では、「Curio」は極めて小規模で限定されたツールであるに過ぎない。その中で「Curio」の存在意義をどのようにアピールしていくかが常に検討されてきた。

現時点において「Curio」の運営事務局が採用しようとしているのは、「Curio」を連絡手段に特化させていくという方針である。前述したように「Curio」では厳密な会員資格の管理を行っており、「Curio」内の情報にアクセスできるのは千葉大学の関係者だけに限定し

ている。したがって、「Curio」内部であれば、公開された Web サイトに掲載できないような情報も書き入れて他の会員に開示することができる。同窓会総会の議事録や会計報告といった事項も「Curio」であれば掲載することができるだろう。また、「Curio」の中で開設されるコミュニティについても、メーリング・リストとしての運用を強く推奨している。通常のメーリング・リストであれば、メンバーのアドレス管理を参加者の誰かが担当しなければならないが、「Curio」であれば、会員が自らのアドレスの適切な管理さえ行えば、特に管理者の負担を増やさずに連絡手段を維持することができる。

その一方で、「日記」に代表される多数への情報発信という機能は、「Curio」においては縮小していく方向になる。「Curio」を facebook と連携させたのも、その方針に基づくカスタマイズの一環である。

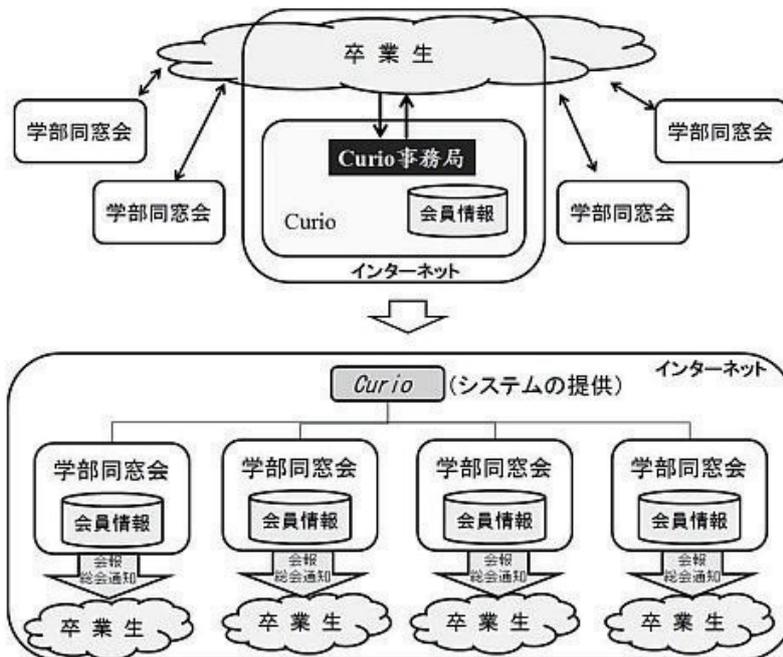
③学部同窓会の活動との連携の強化

「Curio」の活動の基盤は学部単位同窓会による活動にあり、運営にあたっての資金も各学部の同窓会から拠出されている。しかしながら、インターネット上での「Curio」の活動と同窓会報の発送等の各同窓会による従来からの活動とが別建てで行われているため、外見上は「Curio」の運営事務局と各学部の同窓会とが切り離されているかのように見えてしまっている。登録している会員の多くも、自らが所属する同窓会の活動とは別に「Curio」にも参加しているという感覚を有している場合が多い。結果として、出身学部の同窓会には帰属意識を有している会員であっても、「Curio」に対する帰属意識は弱く、「Curio」の利用法も受動的なものになってしまっている。

繰り返し述べてきたように、「Curio」の当初からの目的は、インターネットを通じた相互交流に利用できる同窓会名簿を整備することにある。そこで、2011年以降、「Curio」の中に卒業生情報を整備・強化するための取り組みを行ってきたが、必ずしも十分な成果をあげることができていない。その原因としては2つの点があると考えている。第1に、同窓会名簿に掲載される卒業生情報を管理する権限は各同窓会にあり、「Curio」の運営事務局にはない。同窓会名簿に掲載する卒業生の範囲に関する方針には同窓会毎の違いがあるため、一括した方針の決定を行うことができず、「Curio」の運営事務局が具体的な取扱い方法を決めることができない。そして第2には、卒業生情報の利用を留意するためには、単に出身学部で情報を纏めるだけでなく、学部内の学科等による細分化した整理を行うことが必要であるが、予想以上の頻度での学科再編等が行われており、「Curio」の運営事務局ではその全容を把握することができない。それゆえ、卒業生情報に関しては、従来通りに各学部の同窓会単位での管理に委ねることが望ましいという結論に至っている。

その点では、「Curio」の運営事務局が「Curio」のコンテンツ自体を管理・運営していくことは今後ますます難しくなっていくと予測されている。少なくとも「Curio」の運営事務局が既存の同窓会機能の多くの担うほどの能力はない。そこで、「Curio」の将来像としては、現行の「Curio」を学部同窓会単位の SNS の連合体に再編していくことが望ましいのではないかと考えている（図2）。

図2 「Curio」の将来像



学部同窓会 SNS の連合体としての「Curio」では、現在の運行事務局はシステムの技術的な管理に集中する。「Curio」内の卒業生情報やコンテンツの管理運営は、各学部の同窓会に委ね、「Curio」が千葉大学の SNS であるという位置づけは維持するものの、卒業生を中心とする会員は各学部の SNS に帰属する形となる。これにより各同窓会には SNS の管理という負担が生じることになるが、その負担は各同窓会が独自に Web サイトを開設し、会員限定のページを設置・運営するよりも相当に小さい。また、「Curio」が各学部同窓会の活動と直接に結びつくことで、卒業生の「Curio」に対する帰属意識が高まることも期待できるだろう。

4. 今後に向けて

「Curio」は、システムとしては SNS を基礎としているものの、普及している facebook や twitter 等の商用コミュニケーション・ツールとは異なる方向を目指す必要がある。そのためには、「Curio」にはできて、facebook や twitter にはできないことを考えなければならない。その点で、現在の「Curio」の運行事務局が考えているのは、以下の 2 つの方向性である。

第 1 には、「Curio」の中での新たな人的ネットワークの構築を促すよりも、すでに存在している人的ネットワークを「Curio」の中に取り込んでいくという方向性である。

「Curio」は、入会対象者を千葉大学の関係者という狭い範囲に限定している。「Curio」の会員が今後さらに拡大していくとしても、それらの会員の多くは「Curio」入会前からの人的ネットワークを有していると考えられる。実際、昨年「Curio」運行事務局では入会している会員についてのクラスター分析を行ったが、会員の中で形成されているネットワークはそれぞれの会員の入会年度毎のクラスターとほぼ一致しており、入会以前から存在していたネットワークが「Curio」の中に持ち込まれている傾向が強いことが見出されている。

また、入会にあたっての資格審査を厳格に行っている「Curio」においては、大規模なコミュニケーション・ツールのように「誰が見ているかわからない」という状況にはなりにくい。その点で、「Curio」においてはコミュニケーションにあたっての安心感を高めることが可能であり、その方向性を強めていく必要があると考えている。

そして第2には、「Curio」の中での時間の流れが、既存の大規模なコミュニケーション・ツールよりも緩やかであることを活用するという方向性である。

facebook や twitter では時間の流れが非常に早く、数日間のブランクが生じるだけで、最新の状況をフォローすることが困難になる。しかし「Curio」については、「月1回程度のアクセスで十分に利用可能であること」を方針とした運営を行っており、現実に行われている活動も短期間での連続したアクセスを必要とするほどのものではない。この点は、「Curio」を差別化し、facebook や twitter とは異なるコミュニケーション・ツールとして確立するうえでのメリットになり得ると考えている。

「Curio」にはいまだ様々な課題が残されていることは事実であるが、果たすべき役割についての期待が失われているわけではない。今後も必要な修正を加えつつ、有用なコミュニケーションツールとなり得る運用を図っていく。

1. SNS、インターネットの依存とは

SNS やインターネットを利用する人々は幅広い年齢層、特に、若い世代を中心に急増している。iPad やスマートフォンなどの普及で、より身近に、より日常的に利用できるネット環境が生み出され、生活の中に入り込んできており、小中学生や高齢者など従来、想定されてきていなかった世代も含めてインターネットへアクセスしやすくなっている。いわゆるネット依存と言われる状態は、日常生活の中で、最優先事項としてネットを位置づけている状況で、ネットへの接続を自己コントロールできなくなっている状態を指す。本人にとっての最優先とすべき事項があったとしても、それを無視して、ネットを優先している状況はネット依存といえる。

ネットを常に使用している場合は依存といえるかといえ、そうしたものでもない。仕事で、常時、ネットを用いている人をネット依存という事はない。1 日何時間ネットを使用しているからネット依存といった定義も依存症の考え方からはずれている。例えば、1 日 6 時間ネットを利用しているから依存症であるというのではない。大学生が 1 日 2 時間程度使用していても、試験の開始時間に間に合わなくなってしまったなどという場合には、ネット依存とする事ができる場合もある。

ネット・SNS の問題は根本的にコミュニケーション手段ではなく、一方的なインフォメーションに過ぎないものをコミュニケーション手段と考えている事にある。電話は相手の発声・発語の調子、言葉の選択、応答の間合いなどでノンバーバルコミュニケーションが伴うコミュニケーション手段といえる。手書きの手紙・FAX はその文面の表現等を以て、ノンバーバルコミュニケーションを伴う事ができるコミュニケーション手段である。しかし、ワープロ打ちの手紙・FAX は更に情報量が少なくなるため、一方的なインフォメーションに過ぎないものと化す。ネット・SNS は即応性があるものの、ノンバーバルコミュニケーションの部分が希薄となり、一方的なインフォメーション手段と捉えるべきである。結果として、対人関係に問題を抱えている人には程良い「コミュニケーション」手段として、活用される事となり、対話相手の気持ちがあくみ取れなくても、「コミュニケーション」が成立し、自分を守りながら、相手を攻撃する事が可能となるといった負の部分、影の部分を併せ持つ事ができる。「炎上」といった言葉が成立する原因はこの一方的なインフォメーションを「コミュニケーション」と見なしている事にあり、同時に、依存症になる要因を併せ持つ事となる。

2. 依存症の病理～機能不全家族との関係

依存症 (dependence) とは①精神作用物質ないしは物質 (psychoactive substance or substance) と生体との直接的な相互作用により生じる行動的、認知的、生理的 (身体的) な病態の一つの集まり、②依存症候群を簡略に表現した用語である。依存症で頻繁に使用される用語である乱用 (abuse) は社会的常識からの逸脱を意味している。現在の依存症の定義は必ずしも物質依存を必須条件とせず、身体依存の有無よりも、行為・行動のコントロール喪失つまり人が物質を含む対象に対して支配されるコントロール障害である。依存症はアディクション (嗜癖) (addiction) とも言われる。アディクションは特定の対象への耽溺、熱狂的な傾向を示す行動・習慣が、元々は何らかの利益を生み出していたにせよ、不利益をもたらす行動・習慣となり、自己調節不能をきたし、心身に様々な問題を生じる状態で、依存症はアディクションを疾患及び診断名、治療を意識する場合に用いる用語と考えられる。

依存症の分類にも様々な分類方法があるが、一つの分類方法として、物質依存と、人間関係依存、行為依存（プロセス依存）に分類する考え方がある。①物質依存はアルコール依存症、薬物依存症、ニコチン依存症などの物質に対する依存症であり、入院、通院治療、薬物療法が選択可能な依存症である。②人間関係依存は共依存症、性依存症・恋愛依存症等の依存症であり、入院、通院治療自体は可能ではあるが、薬物療法は存在しないという特徴がある。例外的に、性依存症に対する犯罪者向けにホルモン療法等は存在しているが、日本では実用化されていない。③行為依存（プロセス依存）は摂食障害、DV（家庭内暴力）、リストカット、ギャンブル依存症、買い物依存症等の依存症で、入院、通院治療自体は可能であり、薬物療法は存在しないが、認知のゆがみが存在する。認知行動療法（あるいは行動療法）の有効性が考えられる。

こうした依存症の背景に、機能不全家族の存在が考えられる。機能不全家族は本来持つべき家族機能が不十分な家族であるが、日本では5割、6割以上が機能不全家族であると考えられる専門家がいます。ほとんどの依存症の当事者では機能不全家族の問題、アダルト・チルドレンの問題を抱えているというのが実感である。機能不全家族は親から子への愛情が十分伝わらない状況を生み出すものである。依存症になるか否かを分ける分岐点に機能不全家族の問題があると考えられる。機能不全家族による愛着形成不全により、自己評価が低くなり、承認欲求が強くなり、否認が多くなり、責任を回避し、対人関係が苦手となり、本来の愛情が理解できない等の問題を抱える依存症者が生み出される。

3. ネット依存と他の依存症との関係～一次嗜癖と二次嗜癖

ネット依存になる人は他の依存症を抱えているか、将来抱える可能性が高いと考えられる。ネット依存自体は行為依存に分類できる。ネット依存に陥るとした場合も前述した機能不全家族の問題を抱えている場合が多いと考えられる。機能不全家族の問題を抱えている事により、ネット依存は当然の事、他の依存症にもなりやすくなると考えられる。

依存症、アディクションは一次嗜癖と二次嗜癖に分類でき、一次嗜癖は人間嗜癖と言われる状態で、多くは生育史のなかでもかなり早い時期に形成されると考えられる。具体的には、機能不全家族の中で育つ事により、愛着形成に問題が生じ、愛着欲求が強まるが、満たされない状態が続く。人間関係は成長とともに距離を保つようになるため、心と現実とのあいだに強い葛藤が生じてしまう。そのために愛着の欲求はより性急になり、さらに充足が困難になるという悪循環に陥る。この状態のまま成長したばあい、人は理性では人の限界を了解しつつも、感情ではそれを受け入れられず、満たされない愛情欲求の余りに、強い一次性的の恨みと究極の寂しさをもつようになる。また、この苦悩から目をそらすために、同時に、そうした生きづらい状態のなかで『生き延びる』ために、それを否認しつつそれを抱えたまま生きるときに様々な嗜癖行動としての二次嗜癖が発展していく。二次嗜癖として表面化するのがアルコール依存症や薬物依存症、拒食症・過食症、リストカット、DV、児童虐待などの依存症である。つまり、機能不全家族に育ったような人が自然に自分を育て活かしていくための基本的な部分に損傷を受けているばあい、生きるための二次嗜癖を必要としており、一次嗜癖から二次嗜癖へと移行していくと考えられる。つまり、ネット依存は他の依存症と同様、二次嗜癖として存在する。

4. 依存症になる可能性がある人のSNS、インターネットの正しい利用方法

ネット依存になりやすい人とは機能不全家族に育った人であり、対人関係に何らかの問題を抱え、自己の「コミュニケーション」の手段、「コミュニケーション」の場としてSNS、インターネットを活用することとなる。直接相手と対面する必要性が少ない、SNSは比較的自由に一方的な「コミュニケーション」＝インフォメーションを行う事ができ、あるいは自分の良い面や自分の理想とする自分をアピールする事ができる快適な空間である。何か嫌な事があれば、逃げる事もできなくはない。比較的自由的な空間ではある。しかし、ここで注意して欲しいのは、そうした快適な空間であるからこそ、はまりやすく、快感が得られ、依存症に移行しやすいという事である。

そこで、依存症の傾向を持ちやすいと思う人は、一定のルールを課し、一定時間のみ使用するという方策が採られることが良いであろう。本来は、前述した一次嗜癖をどう回復するかが重要である。

簡単に紹介するならば、他者から褒められたいと思う事をやめ、自分で自分を褒める事。自分で自分をかわいがることができる、一次嗜癖からの回復につながる。こうした方法により、愛着形成不全を乗り越える可能性が高まる。具体的なやり方として、次に示すような考え方をすると良い。

「一次嗜癖を回復する手段」

1. 他者から褒められたいと思う事をやめる
2. 自分で自分を褒める
3. 自分で自分をかわいがる
4. 自分の悪い面、良い面を理解する
5. できない・悪い自分を認める
6. 白黒思考・全か無の思考をやめる
7. 自己決定を行う
8. 「～のせい」という責任逃れの考え方をやめる
9. 現実に直面して問題を解決する
10. 他人は思い通りにならないことを理解する
11. 素直さを身に付ける
12. かっこつけをしない（他人によく思われなくてよい）
13. 自分を認められたいための世話焼きをやめる
14. 子供の頃の親の愛情はもう得られないことを理解する
15. 人は少しずつでも変われることを理解する

(注意) この方法を行う中で、自己嫌悪や自己評価が下がるなど自分自身を追い詰める場合がありえる。甚だしい場合には、迷わず、カウンセリング、精神科クリニックなどを受診することをお勧めしたい。

この方法での回復は個人差があるため、どのくらいの期間かかるかは個人個人で異なる。そこで、この方法を行いながら、インターネットを利用するという方法を推奨したいが、それに抵抗がある場合、あるいは回復途上の場合、他人の手助けも含めて、インターネットの利用に

ついてコントロールするという方策が次善の策として推奨できるであろう。1日の内、自分で自由にできる時間に行う SNS の利用を 1 時間に限定するなどである。仕事（学生なら学業）でのネット接続は除く事となるが、もし、工作中（学業中）に SNS 等に自分の意思で接続している場合はその時間を差し引く事とする。こうしたコントロールを行う事が必要となる。

キャンパスライフと SNS

京都橘大学 看護学部 看護学科 1 回生

吉田 諒介

キャンパスライフとSNS

京都橘大学 看護学部看護学科 1回生
吉田 諒介

自分(吉田諒介)が使うSNS

facebook
(LINE)
Instagram



自分の携帯電話の画面

諒介流 facebook !

Facebook

- 友人のつぶやきなどの閲覧
- 何気ないつぶやき
- サークルイベントの出欠
- 写真の共有

「友達」として登録されている人を中心に不特定多数の人に対してつぶやいたり、写真を公開している。

具体的にどんな使い方を？

友人のつぶやきなどの閲覧

- どんなことをしているのか、どんな悩みを抱えているのか、どんなことに興味があるのかなどを閲覧する。しばらく連絡が取れていない友人の現状が知ることができて便利である。
- これによって、人とのつながりが絶えにくい。関わる機会が1度だけでも、facebookでつながりが維持される。
- また、そのつぶやきに対してもレスポンスすることが簡単である。

何気ないつぶやき

- 自分の現状についてのレスポンスを得られる。これは自分の悩みを聞いてほしい時にうれしい。

この画像の上のようにつぶやくと以下のようなレスポンスが得られた。



サークルイベントの出欠

- イベントを企画して、その情報の共有とイベントへの招待ができる。イベント名・詳細・場所・日時を設定。その後招待するメンバーを選択する。招待された人は「参加」「不参加」「未定」のボタンを押し、それを出欠を確認する。

様々な大学の学生・社会人などを招待でき、人脈の拡大に繋がる。



写真の共有

- イベントやボランティアなどの活動中の写真をそのメンバー内で共有できる。自分が撮っていない場面や他の人からの視点の写真、自分も写っている写真などをここから自分のデバイスに保存できるため便利である。
- これは設定された特定の人が見る・保存ができる。

諒介流 LINE！

LINE(グループトーク)

- アルバイトのシフト調整や連絡事項の拡散
 - サークルメンバー内での情報共有
 - 看護学部1回生内での情報共有
 - 2人以上の友人間での会話

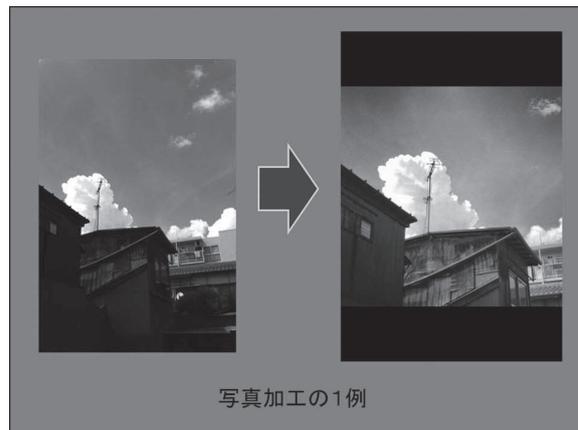
特定のメンバーに対してのみに情報を発信するツールとして使われている。「既読」が表示されるため情報が全員に行き渡ったかどうか分かる。

諒介流 Instagram！

Instagram

携帯電話で撮った写真を加工して、写真のみでつぶやきとして公開する。加工は明るさ・ピント位置・特殊効果など。友達として登録されたユーザーの中のみで閲覧できる。このSNSは、画像をつぶやきとしてアップするので世界各国の人々と言葉の壁を超えて利用できる。もちろん、アップされた写真に対してのコメントや「いいね」のようなボタンもある。

ちなみに自分の友達は外国人の方しか登録されていない。



写真加工の1例

他にはどんなSNSがあるのだろうか？

学生に浸透しているSNS

twitter

Facebook



Twitter

Mixi



Skype



DECOLOG

(LINE)

DECOLOG



学生のSNSの使い方

- 何気ないつぶやき
- サークルのイベントの集客と報告としてのつぶやき
- 写真の共有
- 暇つぶし
- 行方不明の物・人についての情報共有
- 他大学の学生との交流
- 志望している企業の情報収集

SNSの利点と欠点

利点

- いつでも・だれとでも繋がっていただける。
- 疎遠だった友人と新たに繋がる。
- 連絡を取っていない友人の現状知ることができる。
- 国籍の違う友人と繋がる。
- 実際に会わなくても顔が見える。
- 同じ趣味の友人とコミュニケーションが取れる。
- リアルタイムで情報を得られる。
- 今まで関わることのできなかつた人物(芸能人など)と繋がれる。
- 情報がすぐ拡散する。

欠点

- 個人情報が流しやす。
- 失言・リークなどの問題が生じやすい。
- 入学前からコミュニティが形成し、そこに加わり損ねた人間が孤立する。(いじめに繋がる可能性もある)
- 全く関わりのない人物からの「友達申請」の扱いに困る。
- 退会の方法がわからない。
- 安全が保証されていないので不安だ。
- つながりが浅い。
- 情報がすぐに拡散する。

実習で手に入れた情報の取り扱いについて看護学生はどのような意識を持っているのだろうか？

実習で手に入れた情報の取り扱い

- 実習先・内容などの先方の人間の個人名につながるような情報はもちろん、実習をおこなった事実も公開していない。(看護1回生)
- 実習に関する事は一切SNSに出さないようにしてる。また、看護記録等の取り扱いも厳重にしていた。院外に持ち出す際は教員に確認することになった。(現役看護師)

ご清聴ありがとうございました。

